



日本聖公会東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」
青年スタッフ2名より寄稿して頂きました。

想像する事の大切さ

「いっしょに歩こう！プロジェクト」

スタッフ 岩本 翔太

私は震災一ヶ月後から東北教区支援室があったここ仙台で被災者支援をさせていただいていました。今現在は名前を変え「いっしょに歩こう！プロジェクト」仙台オフィスにてスタッフをさせていただいています。

震災当時の頃から考えると半年以上経った今、物資の支援から自立生活への支援、避難所から仮設住宅への引越など様々な場面において過渡期を迎えています。プロジェクトのプログラム内容も同様、避難所に支援物資を持っていくなどの活動から仮設住宅での個人個人での関わり、被災により職を失った被災者の資格取得の援助や原子力発電所の問題がある福島県の子供達の短期疎開プログラムなどにシフト

しています。しかし、今現在でも物資の不足で困っている方、仮設住宅に移れなく困っている方など大勢いることは事実であり、深く関わっていくなかで気づかされます。そして、このような支援の格差がどんどん浮き彫りになっています。

私が深く関わらせていただいているプログラムの一つである福島の子供達の短期疎開プログラムはその一つであります。福島第一原子力発電所の事故に伴い大量の放射性物質が放出したのにも関わらず放射線量がとても高い福島市、郡山市などが避難区域には指定されず東京電力、政府などからの避難援助など具体的な支援がありません。子供達の首からは本人たちは何も分か

らず線量計が下げられ、外で遊ぶことはもちろん外出さえ控えざるを得ない状況を強いられています。

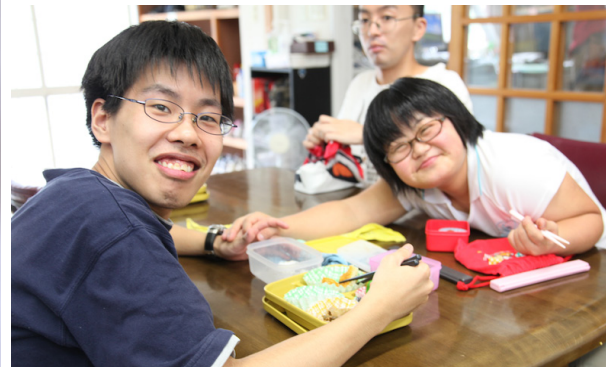
そこで、私たちの繋がりがある福島聖ステパノ教会の信徒さん一家6人を仙台に来てもらおうと企画しました。1泊2日の短い間ではありますが存分に外で遊びまわってもらいたいという思いが伝わり仙台に住んでいる私と同世代の青年達や教会の日曜学校の子供達にも協力していただけました。今回は1家族でしたがより多くの子供たちに遊んでもらいたいと考えております。

今回の短期疎開プログラムから外で遊べる喜び、いっしょに歩こう！プロジェクトの仮設住宅、避難所の訪問などからみんなで囲める食卓など、いわゆる“普通の生活”に対しての感謝の気持ちを改めてたくさんの被災者の方から教わりました。そして、私たち自身もまた被災者の方々に支えられていると実感します。被災地に行く事ができる人はもちろん、行けない人も被災者を覚えて祈る、関心を持ち行動する、日々の生活に感謝するという事はどこにいても変わりません。どこにいても一番の支援は被災地や被災者のことを忘れず想像し続けるという事だと私は常々感じています。

[写真上] 外で遊ぶ筆者(右)と福島聖ステパノ教会の子ども

[写真左] 首に下げられた線量計





【写真左】 気仙沼市の作業所「ひまわり」にてクッキーの袋詰めをする
筆者（右手前）と施設利用者

【写真上】 焼きあがったクッキー
【写真下】 「ひまわり」の昼休憩の様子

17年ごしのチャンス

「いっしょに歩こう！プロジェクト」

スタッフ 松村 希

小学校の時、同じクラスに知的障がいを持つ同級生がいました。私は彼女に対して友達として接せず、彼女にしてきた事はとても残酷でした。

そんな私がこんな形で障がいを持つ方と向き合う事になるとは。しかも地震・津波・火災を体験し今までと異なる生活を強いられている皆さんと。

私は9月からいっしょに歩こう！プロジェクトに関わっていて、障がいを持つ方の支援プログラムを担当しています。現在、2つの施設と関わりを持っています。そのうちの1つが、宮城県の北端にある気仙沼市の「ひまわり」という施設です。ひまわりは、30名ほどの軽度の知的障がいを持つ方が通う通所作業所で、クッキーやパンの製造などを通して就業に必要な知識や技術を身につけるための施設です。

利用者の中に、私と同じ23歳の女の子がいます。ある日、ひまわりでいっしょに作業していた時のことです。クッキーのラッピングの蝶々結びに苦戦しているので「代わろうか」と言ったら「ううん、諦めるって言葉きらいだから」と言われました。そして「好きな言葉はね、努力。」と教えてくれました。その発言に私はすごく驚いたのです。小学校のとき同じクラスにいた彼女と

は、そんな話はしたことがありませんでした。しようともしませんでした。

2ヶ月間毎週通い、最近ようやくひまわりで名前と顔を覚えてもらえました。利用者の皆さんはのんちゃん、のんちゃんと名前を呼び、1週間さみしかったよと声をかけてくれます。

私はいま、小学生の私がないがしろにしてしまったあの彼女との出会いにもう一度向き合うチャンスを与えられていると思っています。

時には、利用者の皆さんは小学生の私がしてきた事はお見通しなのではないか、どんな気持ちで私が向き合っているのかを知っているのではないかと考える事があります。利用者の皆さんの目はとてもキレイで、真っすぐで、なんでも見抜けそうな目なのです。

また、例えばこれから母になる可能性のある私が、なにか障がいを持った子どもを授かったとき、ここでの出会いは必ず生きるんだろうな、むしろそんなような何かのための出会いなんだろうな、と、そんな事も考えます。

毎日いろいろな事を考えます。そのどれもが、3・11以前の自分ではどうてい考えなかったであろう事ばかりです。そして自分一人ではなく他の人とも考えを共有する事で、私の財産が増えていくのを感じます。被災地と呼ばれる地に支援団体のスタッフとして入り、こんなに多くのものを私が授かっていいのかとためらうほどです。ここで過ごす日々、ただ感謝する毎日です。

「若者がもっと主体的に教会に関わってゆきたい、そのために同世代とのつながりを作ってゆきたい」—2012年開催予定の全国青年大会に向けて今年8月29～30日に行われた日本聖公会「青年井戸端会議」（京都教区センターにて）において、参加した青年たちからこのような声が挙がり、【U26“ゆーじろう”】という青年のネットワークができました。名前の由来から、18歳から26歳までの青年の集まりとし、全国的な青年活動を行い、同世代とのつながりを深めると共に、青年たちが更に教会とつながってゆくきっかけを作ることを目指しています。

まだ活動が始まったばかりで有志の集まりですが、11/12には2月に予定している第一回目の企画について話し合うために、全国から約20名の青年が東京に集まりました。どうして私たちはこのようなネットワークを発足させたのか、青年活動についてどんな思いを持っているのか。みんなで気持ちを共有し、分かちあうことから話し合いは始まりました。会議では初めて顔を合わせる人たちも多くなりましたが、同じ目的に向かい朝から晩まで共に時間を過ごすこ

とで、短い時間でもぐっと距離が縮まり、ひとりひとりの力が新たな活動のエネルギーになったように感じました。

2月の企画については話し合いを重ねているところですので、詳細は追ってお知らせいたします。

(U26の活動のホームページを開設しました。

→ <http://nssk-u26.blogspot.com>)

11/12 東京での話し合いの様子



アメリカ聖公会からの留学生よりメッセージ

ケイティ・ヤングさん（米国・テキサス州出身）は、名古屋学生青年センターが受け入れた留学生です。

アメリカから来ました、ケイティ・ヤングです。滞在期間は1年の予定で、名古屋に住んでいます。この1年は主に名古屋学生青年センターで働き、みつば幼児グループ（2～3歳児保育）や小学生の英会話クラスでお手伝いをします。また、毎週木曜日には野宿生活者の給食活動を手伝ったり、火曜日には国際子ども学校（フィリピン人の子どもの学校）で英語などを教えたりもしています。私は、それらに加え、教会の群れに連なり、教区（や管区）の青年活動や、東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動にもぜひ参加したいと思っています。

日本に来られたこと、そしてこうした様々な奉仕の業に出会えたことはとても恵まれていると感じています。私は日本文化を楽しく学んでおり、また日本の食べ物が大好きです。新しいことに会えると、とてもワクワクします。そして、他の都市、殊に京都へ行って様々な経験をしてみたいと思っています。この1年どんなことがおこるか分かりませんが、とても楽しみです。

感謝を込めて、主の平和。



2011年8月13日(土)～18日(木)、香港聖公会東九龍教区聖匠教会、聖匠賓館におきまして、同会議が行われ、16名のメンバーが世界の聖公会から集まりました。青年のみなさんにお伝えしたいことを3点に絞り書かせて頂きます。

1、香港聖公会での体験

全聖公会の中で一番若く、一番活気に満ちているとの、香港聖公会司祭の発言の通り、1997年にイギリスの植民地から解放された香港は3つの教区と、1999年ポルトガルの植民地から解放されたマカオの宣教地区とで、独立管区として香港聖公会を形成しています。初日に東九龍教区主教座聖堂で経験した、青年の礼拝は、青年自身が3月から計画し、聖餐式の中で青年によるゴスペルを取り入れ、苦しみを生き抜かれるイエスというインテンションから、日本の被災者のことを覚えた礼拝が行われました。この礼拝に香港、マカオから約500人の青年が集まり、このような初めての礼拝の試みを体験していました。礼拝を青年が作るこのような体験は大変素晴らしく、また他者のためにあろうとするその姿に、今の香港聖公会のエネルギーの源を感じました。



2、全聖公会中央協議会 (ACC) 報告議案と女性・少女に対する暴力を終わらせる取組



ACC(2012)に向けての報告議案を作成しました。ACCは世界の聖公会のつながりの一つで、各管区を代表する信徒、司祭、主教からなる集まりで、青年代表として国際青年ネットワークは2名の青年を送りだしている。青年ネットワークが強く呼び掛けている事柄の一つが、女性・少女に対する暴力を終わらせる取組みです。すでにホームページ上に掲載されているワークショップ資料を、是非青年の集まりでも使い、この呼びかけに、青年自身の日常の中で応答して頂きたいと願っています。

3、全国青年大会、日韓青年セミナーと「いっしょに歩こうプロジェクト」

全国青年大会、日韓青年セミナーは、特に韓国との歩みや歴史への責任、平和を作り出す使命という点において、各管区代表にはインパクトのある報告として伝わったと思われる。特に、ウェールズ聖公会のティム、南アフリカ聖公会のマロペンガからの反応があり、歴史認識と和解、平和、暴力反対の視点から共感が得られました。このことは、痛みを共有し、共に歩むために聖公会というネットワークが血の通ったつながりであることを教えてくれると同時に、この世界に対しての平和の器として重要な役割を担っていると感じました。

東日本大震災の被災者支援とヴォランティアについて、池住圭さんが、DVDを交えながら訴えられ、「いっしょに歩こうプロジェクト～まどか荒浜支援」について訴えられ大きな共感が得られました。池住圭さんの働きのお陰で、2011年9月から一年間、「いっしょに歩こうプロジェクト～まどか荒浜」の支援をネットワークとしてすることになりました。各管区でこのことを青年に知らせ、祈りがなされています。これは、ネットワーク史上初めてのことで、具体的なことに取り組むことは大きな前進といえます。



4、アジア地区ネットワーク



今回 150 人規模のアジア青年大会が香港で開催予定でしたが、20 数名しか参加希望者が得られず断念されました。主催は香港聖公会でしたが、2013 年にあらためて開催を目指しています。このことを是非アジアの各管区も積極的に捉え、ともに準備できたら実り多い集まりになるだろうと思います。韓国、台湾、東南アジア、スリランカ、インド、ミャンマー、バングラデシュ等がネットワークとのつながりが薄いですが、今後、積極的に交流していけたらと思います。

昨今、海外に出かける青年が減ったと言われます。理由はよく分かりませんが、異文化の他者と出会い、刺激を受け、共に生きようとするのは、色んな面で福音をもたらすと思います。今、海外のキリスト教青年の集まりに出かけることにこれ程支援を受けられる体制が整った時代はないかと思えます。是非青年のみなさんには何をおいても出かけて出会ってきてもらいたいと思っています。一生の宝になること間違いなしです。

リレートーク

平和のかたち 5

今回は、宮城県石巻市で超教派の被災者支援活動に携わる浅海由里恵さんに執筆して頂きました。

「助ける、ということの不条理を意識しなければならない」

震災後、しばらく本を開く気になれなかった。はじめて読み通した本の中に、書かれていた一文である。

私ごとだが、先日宮城県石巻市に住民票を移した。住民票の移動は市役所に「ここの住民になる」という届を出せば済む。それは、届を出すだけのあっけないものだが、この地に住んで深く長く支援として関わっていかうと思ったからだ。

この地にいればいるほど、「自分だけが生き残ってしまった」という声を聞く。いまだに瓦礫撤去すら進まないこの場所で、家族がすべていなくなってしまうという言葉が聴いたとき、何もできないという徒労感に襲われる。どんな一言ですら、何も浮かばない。

住民になったからといって、私はこの震災を罹災していない。経験すらしていないことに言葉を失ってしまう。罪悪感すら、感じてしまう。自分がもしその場にいたら、どういう体験をしていたのだろうか。そのときまで、生活の営みがあった。どこにいても変わらない日常があった。しかし、あの瞬間に変わってしまったという衝撃。生活の根底を揺すぶられる出来事によって、形あるすべてのものが変わってしまった。

今はただ、被災地もこの日本も混沌としている。今後、どうなるかはわからない。でも、支援者は支援・援助であるという一線は越えてはならない。と自戒を込めて思う。

「被災地から平和をイメージする」という文章を求められていると思う。だが、そういう文章なんて書けない。支援者として来た以上、どこまでいっても「傍観者」であり、「帰るべき場所」がある者である。「20年間ありがとう」と言いながら自分の家を捨てざる得ないひとの気持ちは分からない。「何かしたい」とこの地に踏

み入れ、「助けたい」と思いながら限界を感じ、言うべきことばすら発することができない。「平和」と叫ぶことすらできない状況がある。「これは私の戦争」こう位置づけたひとたちがいる。福島において。この宮城において。自分の生存を脅かされる。だから闘うのだと。私には、まだここでの生活を「これが私の戦争だ」と位置づけることはできない。一緒にこぶしを挙げて闘うことなんてできない。

それでも私はこういうジレンマを考えながら、さらにもう一歩前にでて強く、共に進もうと思う。私がこの場にいることは、「支える」とか「与える」とか「闘う」のではなく、この地にいる「不条理」を考えながら、「補う」ために派遣されたのだと考えている。

浅海由里恵

(大阪教区聖ガブリエル教会信徒)

引用の本：

池澤夏樹『春を恨んだりはしない
震災をめぐる考えたこと』

(中央公論社、2011)

★プログラムなどの最新情報は、「全国青年ネットブログ」にて随時更新中。

★「メーリングリスト」登録や「青年プログラム参加助成制度」の申請等は、ホームページより。

ブログ

全国青年ネットワーク ブログ

検索

<http://youthnsskk.exblog.jp/>

ホームページ

全国青年ネットワーク

検索

<http://www.nsskk.org/youth/>

発行 日本聖公会全国青年ネットワーク事務局

愛知県名古屋市昭和区宮東町260 TEL:052-781-0165 FAX:052-781-4334 E-MAIL:youth.po@nsskk.org